

はじめに

私が在住する滋賀県には、中世戦国時代の城跡が数多く点在しており、その有名なものでは信長が築いた安土城、秀吉の長浜城、浅井長政の小谷城、明智光秀の坂本城、石田三成の佐和山城、秀次が築いた近江八幡城などがあげられます。これらの城跡を訪ねその当時を偲ぶことにより、そこに築かれた歴史風俗、建築・絵画・工芸等の芸術文化、人の暮らし振りなどあらゆる面に興味が注がれます。また、これらの史跡を舞台に展開された織田・豊臣時代は、群雄割拠の戦国後期から天下平定への移り替りでもあり、更に、文化面では、東山文化から異国文化も加わった絢爛豪華な安土・桃山文化へと華々しく開花した時代でもあります。ここに登場する信長、秀吉は、私の最も好むところの人物であります。

私が錦絵(木版による多色刷版画のこと)を収集した切掛は、天正十年明智光秀の娘婿明智左馬之助光春が光秀の死を知り安土城から瀬田橋を渡り、坂本城へ向かう途中、秀吉軍の堀久太郎秀政本隊と遭遇し、大津から唐崎まで愛馬に乗り湖水を渡る様を描いた錦絵と出会い、その美しさと雄姿に感動したのが始まりです。それ以来、錦絵を通して織田・豊臣時代の歴史の史実を見てゆきたいと心にきめ収集に思い立ちました。

ここに収集された錦絵は、江戸後期から明治初期にかけての作品が主体であり、その画題は、江戸後期庶民の人気の読み物「絵本太閤記」や「絵本豊臣勲功記」、「新書太閤記」などがその元となっています。

特に、「絵本豊臣勲功記」は、浮世絵士歌川国芳がその挿絵である武者絵を画いており、また、彼の弟子達(芳幾、芳房、芳艶、芳員、芳形、芳虎、芳年、芳春など)も同様の武者絵を数多く画いております。

作品には、寛政三年頃から明治八年頃まで検閲制度により改め印が押されています。出版物検閲制度で一番厳しかったのは、文化元年頃から天保十五年位であり、天正以来の武者に姓氏、紋所、合印の使用を禁じた「絵草子取締令」が出されます。この関係上、明治期まで作品には、名前に当て字を使うこととなり、例えば、織田信長を小田春永、羽柴秀吉を真柴久吉、明智光秀を武智道秀などと表現しています。

しかし、この取締中にもかかわらず多くの作品が出回ったことは、江戸庶民の織田・豊臣に対する人気がいかに高かったことを物語っており、これは、織田・豊臣時代あるいは新時代への一種の憧れを感じていたのかもしれない。これは現代においても同じことが言える様な気がいたします。

僅かではありますがこれらの錦絵を通して、戦国の戦いの空しさとそれを乗り越え天下太平の道を築いた織田・豊臣時代の活力のようなものを多少なりとも感じて頂ければ幸いです。